

お笑い小話

光野 朝風

タイムリミット

新米「警部、犯人の要求までのタイムリミットはあと五十分を切りました！」

刑事「それじゃあ、五時がタイムリミットか」

新米「いえ、四時半です」

刑事「どういうことだ！今から五十分後なら五時じゃないか！」

新米「え？ああ！！僕の時計止まってました！」

刑事「あ、俺の時計も止まっていた。てへっ」

優柔不断の男

男は家から出て、駐車場に向かい、仕事用に使う軽トラックに乗り込み、運転席に座ってから首をかしげた。

「うーん...やっぱ違うよな...」

男は思い直して軽トラックから降りて、普段使う自家用車に乗り込み、運転席でまたうなって首をかしげた。

「やっぱ、もっと軽めでいいか...」

男は思い直して自家用車から降りて、今度は家に置いてあったママチャリを引っ張り出してきて乗った。

「まあ、近いし別にたくさんはないからいいか...」

男は思い直してママチャリから降りた。

ふと横を見ると三輪車がある。

「あれじゃあ乗れないよな...」

しかしとりあえずまたがってこいでみた。

うまくこげない。

男は三輪車から降り、ため息をつき空を見上げた。

「買うの豚肉だけだからな」

男の目と鼻の先にはスーパーの看板がある。

鬼嫁と働き爺さん

昔あるところにおじいさんとおばあさんがいました。

おじいさんは川へ洗濯に行った後に山へ芝刈りに。

おばあさんはおじいさんの働いている間にお芝居を見に行ったり、茶屋や料亭で食事をして楽に暮らしていました。

そんな生活が続いていたある日、おばあさんが家に帰ると、おじいさんはまだ夕食の支度を終わらせていませんでした。

「このごくつぶしめ。まだ夕食の支度をしてないのかい。さっさと支度をおしっ！」

おじいさんは、おばあさんにこき使われる生活にとうとう堪忍袋の緒が切れ、その夜密かに隠してあった刀を持ち出しおばあさんを寝てる間にまっぶたつにしてみました。

するとどうでしょう。

中から若い頃の美人だったおばあさんが出てきました。

おばあさんだった娘は言います。

「あんたごめんよ。あたしが悪かった。今度からあんたには苦勞かけさせないよ」

おじいさんは娘があまりに美人なのででれでれになってしまい、

「いや、いいんだ。わしが全部やるからお前はここにいるだけでいい。何ひとつ不自由させないよ」

と言って娘には何一つ苦勞はかけさせませんでした。

そんな生活が続いたある日、ついにおじいさんは過勞で山の中で倒れてしまいました。

おじいさんは薄れ行く意識の中で気付きました。

「前と変わらない」と。

キメ場

中年男1「ひかえい！ひかえい！」

中年男2「ひかえい！ひかえい！」

中年男1「この紋所が目に入らぬか！！」

一同、静まり返り、目を細める。

代官「おい、見えるか？」

商人「すいません。わたくしめもお代官様と同じ近眼でございまして、遠くのものは、ぼやけてよく見えません」

代官「お前ら、見えるか」

手下「すいやせん。うちら全員近眼です」

代官「おい！じじい！！なんだかよくわからねえが騒がせやがって！野郎ども！いいからやっちまえ！」

時がたち、四月。

代官の仲間「知ってるか、お前、最近水戸光圈が行方不明らしいぞ」

代官「水戸光圈？わしのストッキングをやるから許してくれって言って股引みたいなの脱ぎだしたあいつかな？」

代官の仲間「なんだお前、知ってるのか？」

代官「いいや。知らないな。なんせ近眼だからな」

代官の仲間「それにしてもお前の庭の桜は見事に咲くのお・・・」

代官「そりゃあ、たっぷりと栄養はやっているからな・・・（ニヤリ）」

ペット

「今日はユカちゃんをおいしいお寿司屋さんに連れて行ってあげるよ」

ケンゴの言葉に喜ぶユカ。

「ねえ、今日はケンゴに大事にしているペットも見せてあげたいの。一緒に連れて行っていい？」

「え？ユカちゃんペットなんて飼ってたっけ？」

「うん。いいよね？」

屈託のないユカの笑顔に嬉しくなるケンゴは二つ返事で承諾した。

銀座のとある寿司店で犬らしききぐるみを着た男が寿司を食っている。

「おやじのところのマグロはうまいね。これ朝一だね。最高だよ」

「ありがとうございます」

ユカの隣に座るきぐるみ男。マグロ、中トロ、トロを立て続けに五貫ずつも食べている。

「あ、ペットってそれ？」

ケンゴが思わず聞く。ケンゴの額からは脂汗が止まらない。

「何よ。それってひどいわよ。ちゃんとマーシーって名前があるの！」

ユカの反論に寿司屋の大将が言う。

「あの、うちペットの入店お断りなんですけど」

ユカは目頭を立てて怒る。

「あんたねえ！見りゃわかるでしょ！黙ってなさい！」

「すみません」

気が強そうなのにすぐに黙り込む大将。高倉健に憧れている。

犬はトロをぺろりとたいらげると、今度は

「大将！エンガワとウニとイクラとクロダイとタチウオ。タチウオあぶったのと生とで全部それぞれふたつつね」

ケンゴは焦った。食いすぎだ。この大食いの馬鹿め。人の金だと思って。ユカちゃんとのアバンチュールがめちゃくちゃになる。

「あ、そこの犬！食いすぎだろ！」

思わず突っ込むとユカが割ってはいる。

「マーシーくんになんてこと言うの！マーシーくんは私の癒しなのに...」

ユカが泣きそうになる。男は女の涙に弱い。

「ごめんよユカちゃん。そんなつもりじゃなかったんだ」

「じゃあどういうつもりなの！ペットをいじめるケンゴくんなんて嫌い！」

ユカは立ち上がり大将に言った。

「今頼んだやつ寿司折にして。あと中トロとトラフグ、アワビ、アカガイ、シャコとアナゴ二貫ずつね」

ケンゴはあわてて抗議する。

「ちょっと！そんなに食べるのかよ！」

ユカは無言で涙をぬぐった。

もうケンゴはそれ以上何も言えない。

「お待ちどうさまでした」

大将が寿司折を渡すとユカと犬は出て行った。

「ちょ、ユカ...ちゃん...」

ケンゴは「帰る」と力なく言った。

「十二万円になります」

大将に言われて噴出しそうになった。

そりゃあ、あれだけ食べればかかるわ。

「ありがとうございますっ！」

大将はケンゴが出る際に深々と頭を下げた。

大将は高倉健に憧れている。

ケンゴが外に出ると、出入り口のすぐ横の壁に先ほどの犬が寄りかかり、きぐるみのままタバコを吸っていた。

犬はケンゴの出てきたのを見るとタバコを足で踏み消し、ケンゴの肩をポンポンと叩いた。

そして犬は言った。

「まあ、そんなしょっぱい人生の一コマもあるって」

がっくりと肩を落とすケンゴに犬は哀愁漂う背中を見せながら去っていった。

「待て」

ケンゴは気がついた。

「元はと言えばお前のせいじゃー！」

ケンゴの声は銀座界隈にむなしく響いた。

とりあえず、明日ユカちゃんに謝って機嫌を直してもらおう。

惚れた男は、辛い。